

覚えるべきブロックポジション5つとその構造

～暗記、把握のための特別メニュー～

どうも、大沼です。

別で配布している講座で、3ノート・パー・STRING(3nps)・スケールの基本的な練習法を解説しました。

なのでこちらでは、3npsと双壁を成すであろうスケールポジションの把握、分類法である【5つのブロックポジション】についてやっていきたいと思います。

いつか(2018年頃?)youtubeで話題になった、所謂、「CAGEDシステム」とも重なるものですが、実際のところ、このシステムはかなり前から存在しているものです。

個人的には、バークリー音大でギター講師をされているトモ藤田氏の(恐らく)最初の書籍である、「演奏能力開発エクササイズ」にこれに近いものが載っていて、それで覚えた記憶があります。(※その書籍では「CAGEDシステム」という紹介のされ方ではありませんが)

今、手元にある「演奏能力開発エクササイズ」を見てみたら、初版が2001年になっていたのので、例えばバークリーなど、世界中の教育機関を見たら、それよりも前から教えられているのではないかと推測できます。

後は、ギターの構造を学んでいけばいくほど、「コードヴォイシングとスケールポジションの重なり」と言うものに気が付く瞬間があるので、世の中には、一個人としてこれに気が付いて、独自に練習していた人も沢山いただろうな、とも思います。

と言うことで、前置きが長くなりましたが、もしかしたら「知っていて当然」とまで言っても良いかもしれないくらい、3npsと並んで基本中の基本となるスケールの弾き方ですので、この機会に完璧にマスターしてしましましょう。

■5つのブロックポジションと、その覚え方、他の要素との関連性■

さて、このテキストでは、基本的には全てCキーでの解説になります。

各ポジションには色々なコードヴォイスングが重なりますが、対応させるコードもCキーのダイアトニックコード群から出てきます。

※Cキーのダイアトニックコード

3和音→C、Dm、Em、F、G、Am、Bm(♭5)

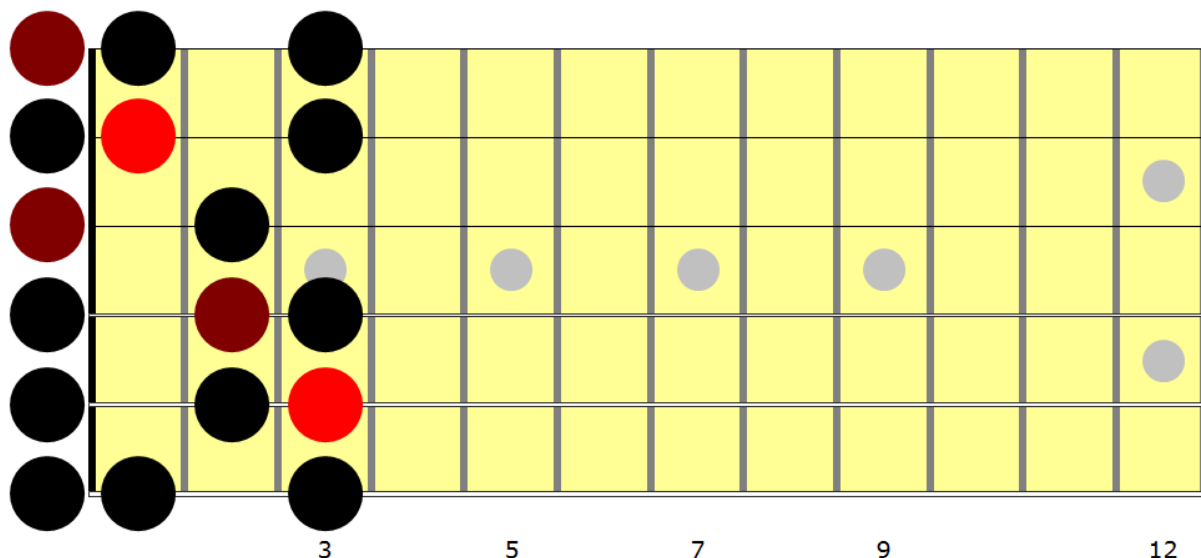
4和音→CM7、Dm7、Em7、FM7、G7、Am7、Bm7(♭5)

最初はCキーで全てのポジションを把握し、その後、他のキーで使う時には、丸々ずらして対応させていきましょう。

それでは、まず1つ目ですが、こちらのポジションになります。

(※以下、各ポジションの番号はこのテキスト用に付けたものですので、世の他の解説とは一致していない場合もあるかもしれません)

図1、ブロックポジション1、ローコードCの形に対応する場所



(※赤丸と茶丸はCトライアドのコード・トーン的位置。以下、全ての図で、CAGEDシステムで基本に見るヴォイスングは同じ色で表します)

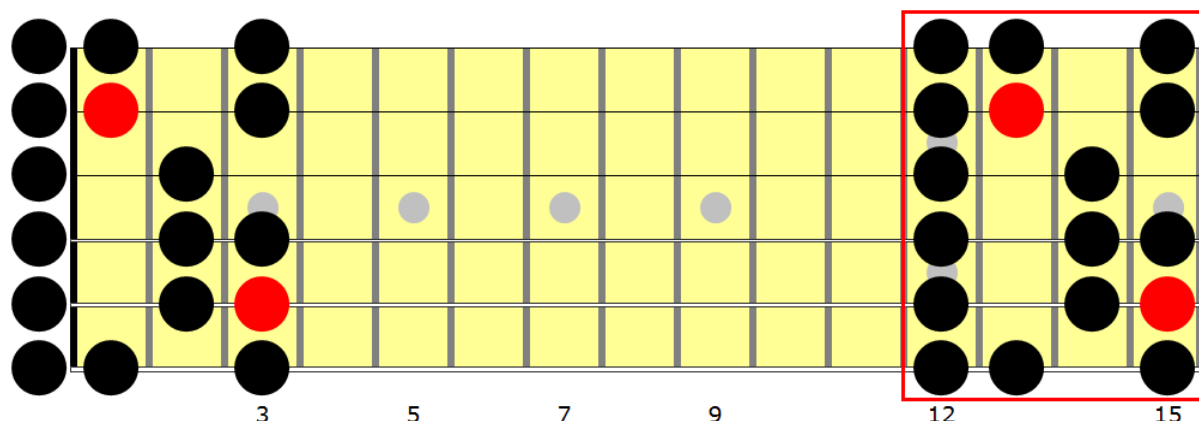
さて、このポジションですが、上記の開放弦が絡むローポジションでは、1フレットに人差し指、2フレットに中指、3フレットに小指を対応させて弾きます。

スタートにする音の候補は、5弦3フレットのC音(小指)辺りが基本ですが、その他には、6弦開放E音などから始めるのもあります。

そして、この場所でこの図の通りに弾けることは「基本中の基本」として非常に大事なのですが、逆に言えば、開放弦を使わないバージョンも練習しないと、他のキーではフレットごとの指使いが対応させられません。

なので同時に、1オクターブ上げた場所で、開放弦を使わないパターンも練習しておきましょう。

図2、ブロックポジション1、ローコードCの形に対応する場所、1オクターブ上



こちらは、12フレットから順に、1フレットに指を1本ずつ人差し指→小指を対応させて弾きます。

もし、12フレット周辺のハイポジションで弾きにくければ、他のフレットにずらして弾くのもありでしょう。

この形は、CAGEDシステム的にはローコードのCトライアドに対応する場所ですね。(※前ページの図参照)

その他には、ヴォイシング自体では、かなりのものを重ねて見る事が出来るのですが、重要だと思うものは、6弦ルートの方は、

- ・Em(Em7)のローコード(ハイポジションだとバレーコード)
- ・F(FM7)系(バレーコード)
- ・G(G7)系(ローコード)

5弦ルートの方は、

- ・Am(Am7)系(ローコード)

辺りでしょうか。

譜例1、ブロックポジション1と重なる重要なコードヴォイシング

※実用性とは関係無く、ポジションと重なっている代表的なヴォイシングを表記しています。

The image shows a musical score for guitar with two systems of chords. The first system covers measures 5 to 7, and the second system covers measures 8 to 10. Each chord is represented by a treble clef staff with a chord symbol above it and a guitar tablature below it. The tablature shows fingerings for the Treble (T), Alto (A), and Bass (B) strings. The chords are: C, C, Cmaj7, Cmaj7, Em, Em, Em7, Em7, F, F, Fmaj7, Fmaj7, Fmaj7, Fmaj7, G, G, G7, G7, Am, Am, Am7, Am7.

これらは、いきなり全てを覚えろ、と言うものではなく、最終的に見えていたいヴォイシングの一覧ですね。

最初はやはり、CAGEDシステム的にローコードCの形を基準に見ていくのがわかりやすいかと思います。(※他にわかりやすいヴォイシングがあればそちらでも構いません)

後は、チャーチモード7種のスケールで言うと、

- ・6弦トニックならば、Eフリジアン、フリディアン、Gミクソリディアン
- ・5弦トニックならばAエオリアン、Cアイオニアン

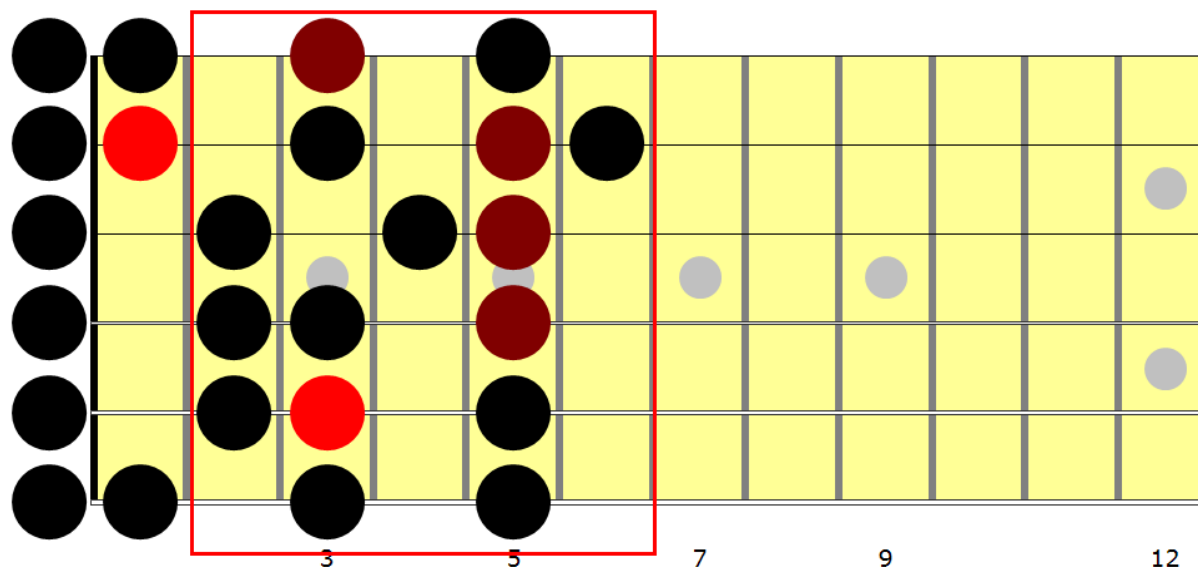
辺りが、このポジション内でほぼ完結するように弾けますが、こういった見方までしているとキリがないので、やはりこちらも、最初はCアイオニアン(Cメジャー)スケールで見ていくのが一番良いでしょう。

その他、別途配布している、コード・トーン・アルペジオ講座や、3ノート・パー・ストリングスケール講座の内容とも被るところが沢山ありますので、そちらも参考にしてください。

全体像を詳しく解説する為に最初から色々と書きましたが、基本的には、一番重要な、把握しやすいものを基準に覚えていくのが、混乱しにくく良い練習になりますね。

それでは、2つ目のポジションにいてみましょう。

図3、ブロックポジション2、ローコードAの形に対応する場所



※ポジション1との位置関係を把握する為に、そちらも表記しています。

ここは、6弦3フレットに中指を置いて弾き始め、2弦から人差し指を3フレットにずらし、そのまま他のフレットに残りの指を対応させて弾きます。

CAGED的には5弦ルートのAトライアド(バレーコード)の形を基準にするポジションですね。
(※今はCキーでの解説なので、5弦ルートのCのバレーコード)

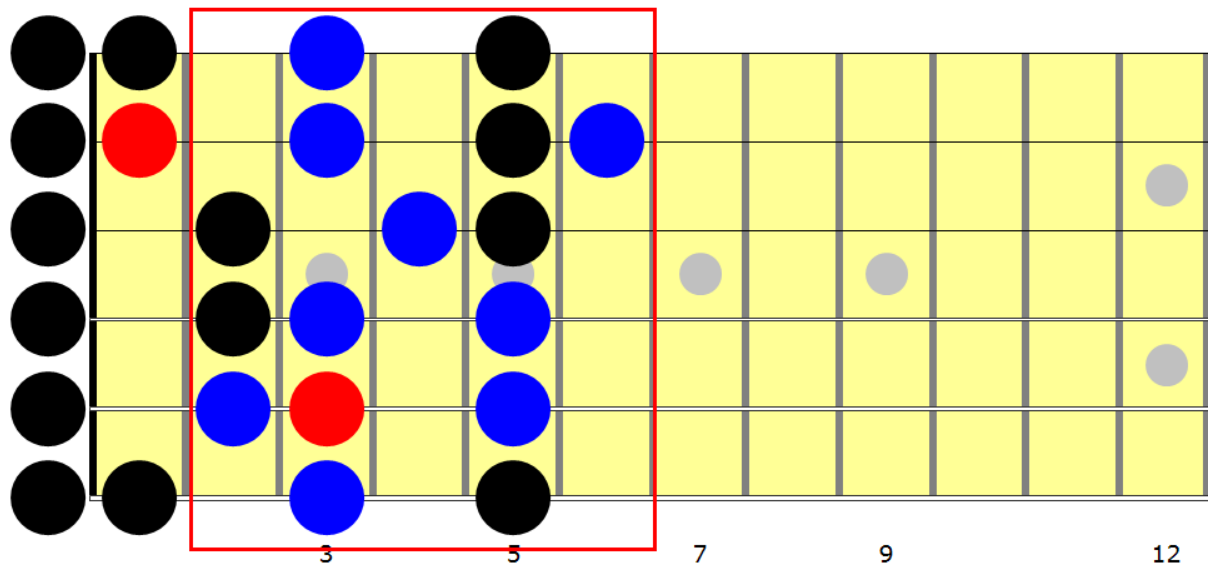
譜例2、ブロックポジション2と重なる重要なコードヴォイシング

	C	Cmaj7	G	G7	G7	Bdim	Bm7(♭5)
Staff							
T	3	3	3	3	3	3	3
A	5	5	3	3	3	4	2
B	5	4	4	4	4	3	3
A	5	5	5	3	3	3	3
B	3	3	5	3	3	2	2

6弦トニック(ルート)的に見る場合は、3フレットG音からGミクソリディアンとして、6弦から真下に見ていく感じだと把握しやすいですね。

このポジションは、演奏ジャンルによってはほとんど使わない人もいますが、例えば、6弦ルートのX7(今はG7)のコード・トーン・アルペジオが含まれている場所です。

※X7(この例ではG7)のアルペジオ(青丸)

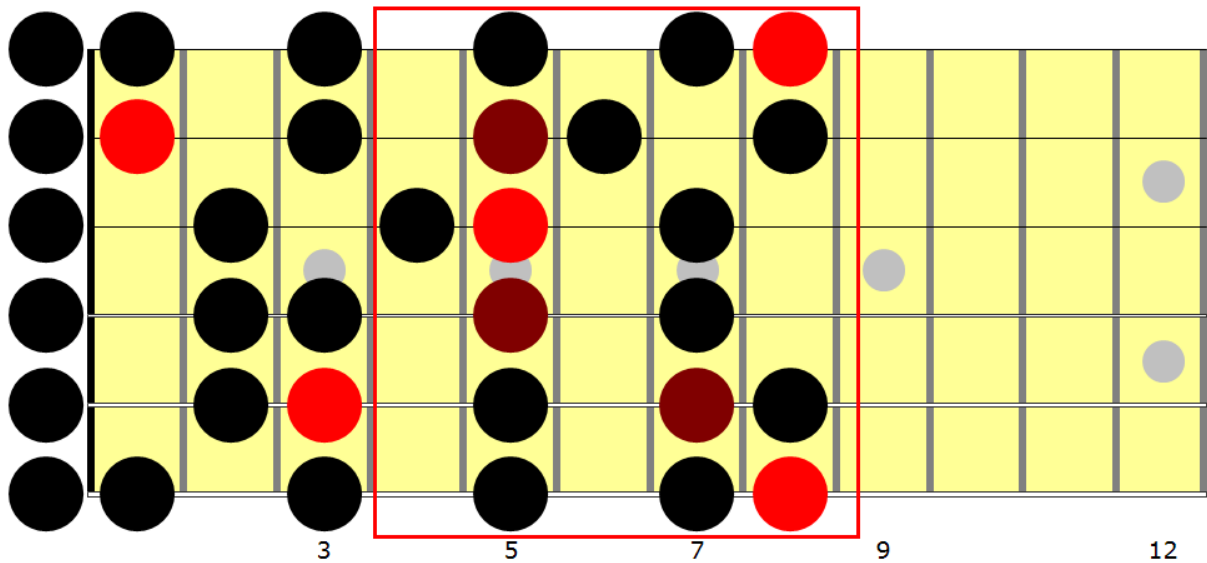


スケール演奏的にこのポジションをあまり使わない人でも、このX7のアルペジオは非常に大事なものですので覚えておきましょう。(※こちらも詳しくはアルペジオ講座vol.03で解説しています)

後は、先の譜面に記載しましたが、コード・ヴォーシング的には、6弦ルートのGトライアドとG7、5弦ルートのBm(♭5)(=Bdim)やBm7(♭5)も重なってきますね。

次に3つ目のポジションです。

図4、ブロックポジション3、ローコードGの形に対応する場所



ここは、CAGED的には、6弦ルートのローコードGの形でCトライアドを見る場所ですね。

基本的に5フレット人差し指から1フレットずつ対応させ、3弦上でだけ1フレット左に指をずらして弾きます。

スケールポジション的には、6弦トニックのCアイオニアン(メジャー)スケールか、Aエオリアン(ナチュラルマイナー)としてよく使う代表的なポジションでもありますね。(※それと同時にGメジャー&Aマイナーペンタの代表的な場所とも重なります)

コード・ヴォイシングとしては、6弦ルートのAm(Am7)やBm(♭5)(=Bdim)とBm7(♭5)、5弦ルートのDm(Dm7)等も入っています。

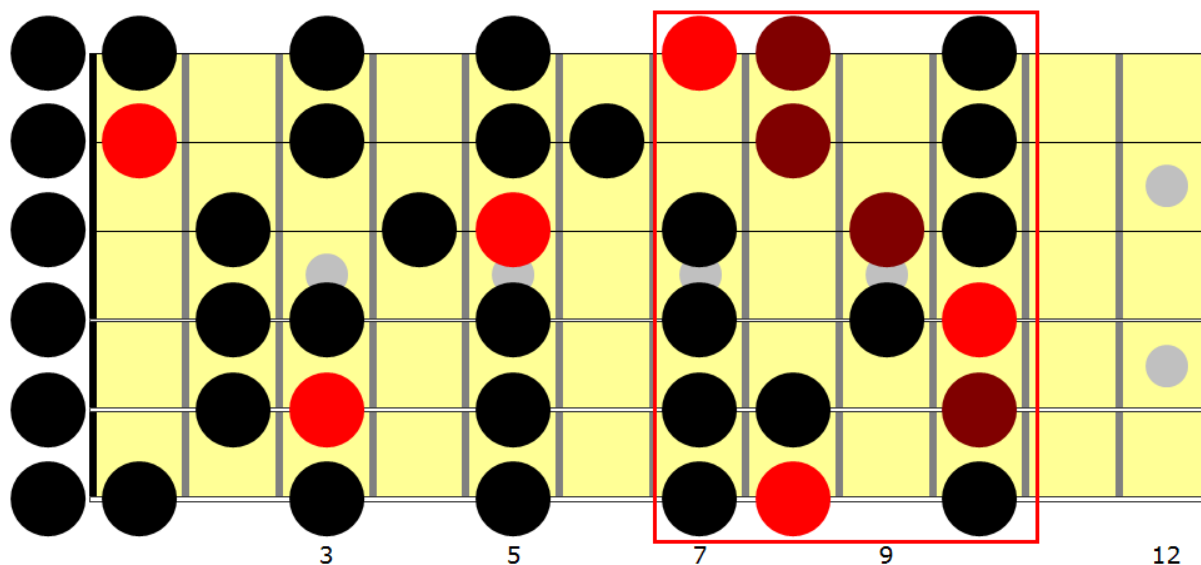
譜例3、ブロックポジション3と重なる重要なコードヴォイシング

	Am	Am7	Am7	Dm	Dm7	Bdim	Bm7(♭5)
14							
15							
16							
T	5	5	5	5	5	7	6
A	5	5	5	6	6	9	7
B	7	5	5	7	7	8	7
B	7	7	7	5	5	7	7
B	5	5	5	5	5	7	7

(※6弦ルートのBm(♭5)(=Bdim)のヴォイシングはほとんど使わないかと思います)

続いて4つめのポジションになります。

図5、ブロックポジション4、ローコードEの形に対応する場所



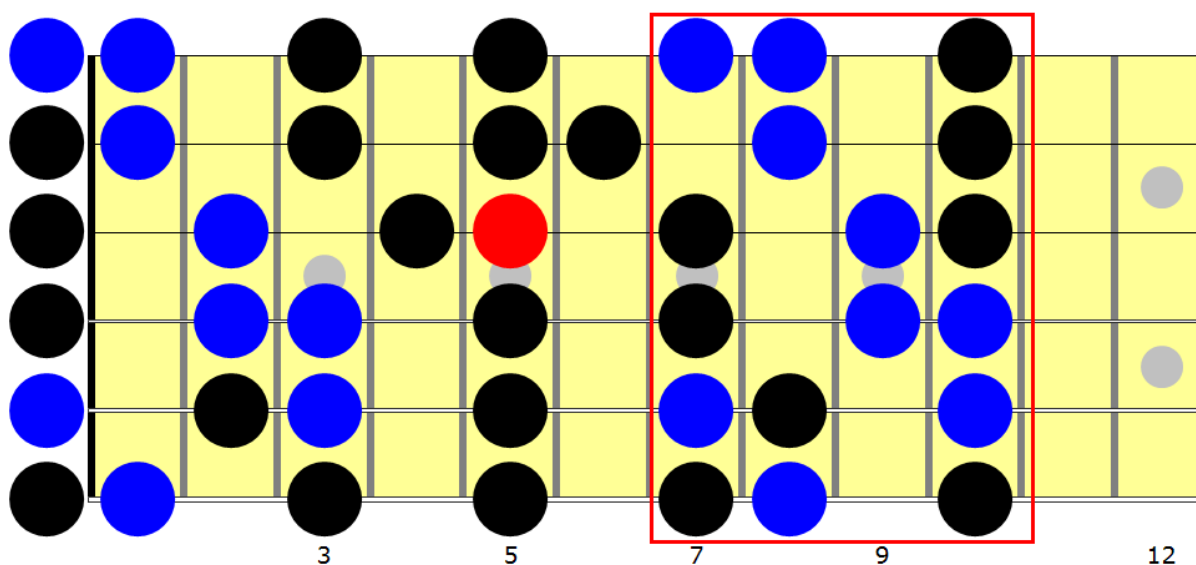
ここは、CAGED的には6弦ルートのEコードの形で、Cトライアドを見る場所です。

スケールとしては、他の教材では、「Cアイオニアンを6弦から1弦まで、真下方向に展開していく場所」と説明していたりもしますね。

指使いは、素直に7フレット人差し指から順に対応させ、ズれる所のない場所です。

図1のポジション1で、FM7でも同じことが出来るのですが、6弦ルートのXM7のアルペジオが収まるポジションでもあります。

※6弦ルート、XM7のアルペジオ、CM7&FM7の場合



これらは、ポジション2のX7のアルペジオと同じく、必ず手に覚えさせておきたいところです。

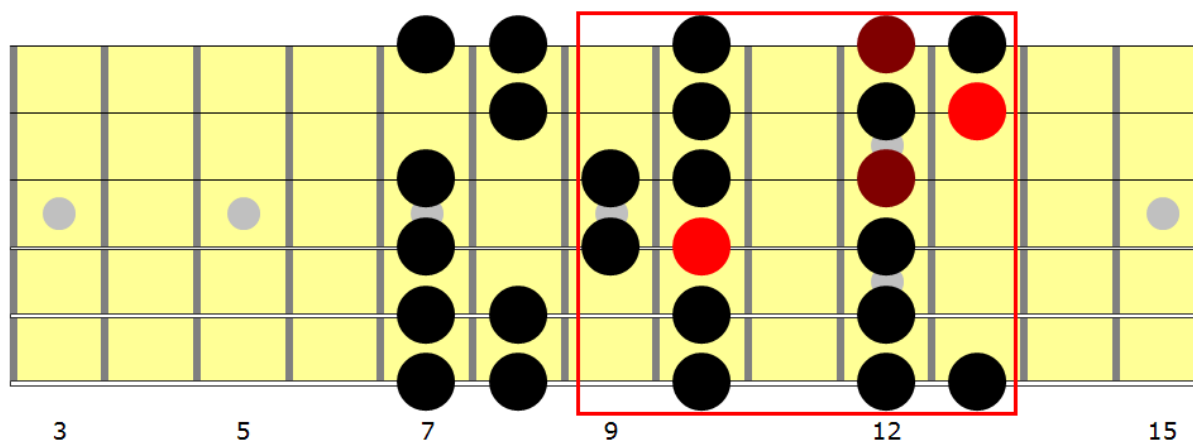
コードヴォイシングとしては、やはり、6弦ルートのコトライアドとCM7、5弦ルートならば、Em(Em7)とF(FM7)なども入っていますね。(※後は前のポジションと被るところでBm7(b5)なども)

譜例4、ブロックポジション4と重なる重要なコードヴォイシング

Chord	C	Cmaj7	Cmaj7	Em	Em7	F	Fmaj7
T	8	8	8	7	7	8	8
A	8	8	8	8	8	10	10
B	10	9	9	9	7	10	9
B	10	10	9	9	9	10	10
B	8	8	8	7	7	8	8

それでは今回最後となる、5つ目のポジションです。

図6、ブロックポジション5、ローコードDの形に対応する場所



ここは、CAGED的には4弦ルートのローコードDの形で、コトライアドを見る場所です。

スケールポジションとしては、6弦トニックのDドリアンとしてかなり使いやすい場所で、そちらとしても丸々覚えてしまいたい重要なポジションです。

指使いは6弦10フレット人差し指から始め、4～3弦で左にずれ、2～1弦でまた戻る形ですね。

コードヴォイシングとしては、6弦ルートのDm(Dm7)系、5弦ルートならばG(G7)が入っていますね。(※コードとしてはあまり鳴らしませんが、6弦ルートのF系のヴォイシングも見ることが出来ます)

譜例5、ブロックポジション5と重なる重要なコードヴォイシング

The image shows a musical score for guitar. It features a treble clef staff with five chord voicings: Dm, Dm7, Dm7, G, G7, and F. Fingerings are indicated above the notes: 20 for Dm, 21 for G, and 22 for F. Below the staff is a guitar tablature with strings labeled T, A, and B. The fret numbers for each string are: Dm (T:10, A:10, B:10), Dm7 (T:10, A:10, B:10), G (T:10, A:12, B:10), G7 (T:10, A:12, B:10), and F (T:13, A:10, B:13).

そしてこの5つ目のポジションの次は、最初に載せたポジション1に続いていく分けですね。

先ほども少し書きましたが、別途配布している【3ノート・パー・ストリングスケール講座】や【コート・トーン・アルペジオ講座】で解説している内容ともかなり被る部分がありますので、そちらも合わせて使ってもらえると嬉しく思います。

1つの講座としてまとめるために、それなりの情報量を載せましたが、やはり最初はシンプルに各ポジションを覚えていくことに注力していくのが良いですね。

慣れてきたら、他の色々な要素との関連性を絡めて見れるようになっていきましょう。

それでは、このテキストは以上になります。

ありがとうございました。

大沼